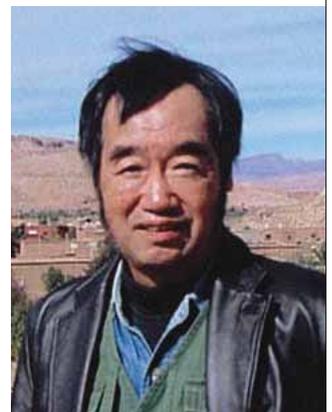


巻頭言

キャリア教育に取り組んできて

小澤 克彦

教養教育推進センター
副センター長



小澤教養教育推進センター
副センター長

「キャリア教育の必要性」というのは、これが単なる「学生の就職支援」だけを意味するのではなく、むしろ「人間としての生涯の設計」にかかわっているからだと理解されます。もちろん、「すべての教養教育」がそれにかかわっているわけですが、これを「意識的・自覚的」にして、さらに「社会生活を前面に押し出して」「具体的に、かつ学生が主体的に」学び取り組んでいく、というタイプの授業が「キャリア教育」であると理解していました。

そうした考えの下に教養教育推進センターは、当時教育学部に所属していた現キャリアセンター副センター長の益川先生にお願いして「自分らしいキャリア設計」を複数開講していただき、また関連の先生に幾つかの授業をお願いしておりました。これらの授業は学生に多大のインパクトを与えていたということが「授業評価アンケート」等で確認できましたが、専任教員の数がすくないためにこうした授業を拡大することができないのであります。

そうした中で文科省も、現在の学生が「受け身で、ただ与えられた授業をこなすだけ」で「社会に生きるという意味」はおろか「大学で学ぶことの意味」すらも理解しなくなっているという危機感から、各大学に「就業力の育成」に力点を置くことを要請・指導してきました。これを教養教育推進センターは先に示した理解における「キャリア教育」であると捕らえ返して、大学執行部の支援を取り付けた上でその充実へと向かいました。

こうして、私はさまざまなタイプのキャリア教育に関わる授業を10クラスほど立案・計画し、目的・内容・授業方法などを構築した上で、私の持つあらゆる手づるを総動員して「企業関係」「金融関係」「役所関係」「マスコミ関係」「教育関係」「大学OB」「卒業生」へと接触し、その趣旨を説明し支援や授業担当をお願いして回りました。殆どの方々はこれを好意的に受け止めてくれ、こうしてキャリア教育の拡大へと向かうことができました。

加えて、岐阜大学はこれを本格化するために「キャリアセンター」を設立するにいたったのはさらに喜ばしいことでした。これを受けて、私たちは手持ちのキャリア教育授業を整理した上でその大半を「キャリアセンター」に託することとして、さらなる発展をお願いしたのでした。心からよろしく願いいたします。

平成24年度第1回キャリアセンターFD報告

8月1日に地域科学部第1会議室で第1回FDが35名(教職員28, 学生1, 外部6)の参加をもって開催されました。

まず小澤克彦先生(教養教育副センター長)から「キャリア教育3年間を振り返って」と題して、平成22年度後期から7つのキャリア関連科目が開設された背景と、社会人をゲスト講師としたこれらの科目の特徴について報告されました。つづいて、授業「職業意識概論」を振り返って野田誠一教授(産官学融合本部)、「社会観・職業観の育成と人生設計」を振り返って山脇正雄非常勤講師、「私は社会でこう生きてきた」を振り返って浅井彰子非常勤講師、そして「自分らしいキャリア設計」を振り返って益川浩一准教授(キャリア副センター長)に、報告をしていただきました。報告や討議では以下のような意見が出されました。



FD研究会の様子

- ・現代の多くの学生は高校時代大学入試だけに追われ、その結果「自分はどうか生きていきたいのか」「どういう仕事をしたいのか」また「どういった勉強を如何にすべきか」という意識を持つことが少なく、また「社会に対する関心」も薄いと言われている。学生の社会や就業に関して、学業の最終期である大学で、それらの基礎的な認識や対応能力について教育される必要がある。

- ・キャリア教育の観点として、単にコミュニケーションのための技術的方法の習得ではなく、人間として相手に寄り添う心などその本質的理解が必要とされる。また、社会認識にとどまらずその能力を身に付ける教育が必要である。グループ討論やワーキング、社会人共同取材などの方法の導入には少人数教育制が必要。

- ・社会人講師による講義では、学生に驚きや発見などの感動を与え、大きな教育効果を発揮している。しかしそれを特別な事例話に終わらせずにより教育効果を高めるには、それを普遍化する大学教員の役割が重要である。

また外部からの出席者からは、「挨拶もできないなど社会性のない学生が多いのは、学生と教員との距離が遠くなり、大学が1つの社会的集団としての機能が低下しているためではないか」などの意見もありました。

最後に平成25年度からこれまでの成果を踏まえてキャリア教育科目を刷新するためにキャリアセンターで検討を進めていることが報告されました。

調査分析 シリーズ

キャリア形成に関する企業の認識と取り組み 報告その1

「職業人としての基本的能力の低下」について

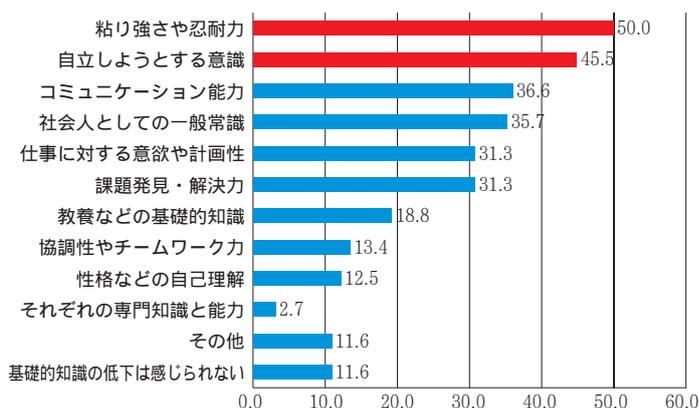
キャリアセンターでは学生のキャリア形成支援活動を推進するに当たり、岐阜大学の学生を就職先として受け入れていただいている東海地域の企業等を対象としてアンケートを実施しました。その結果の一部を2回にわたり報告いたします。アンケートの9月現在の回答率は対象企業総数192社に対して112社58.3%です。

学生の「職業人としての基本的能力の低下」について、先の中教審報告で、さらにその後の全国調査の結果からも指摘されています^(注1)。

大学生に対して「職業人としての基本的能力の低下」と感じられる具体的な事項については、図1のように、「粘り強さや忍耐力」50%、「自立しようとする意識」46%の2項目が、他項目よりもかなり高く認識されて第1位、2位を占めています。このような傾向は前述の全国調査でも「粘り強さ」55%、「主体性」55%と、この2つが1、2位を占めているように、全国的に共通した認識となっている傾向といえます^(注2)。

なお今回の調査ではこれらは企業規模によって認識に強弱がみられ、小企業ほど学生の「粘り強さや忍耐力」の不足の認識が強く、また学生の「自立しようとする意識」の不足については大企業ほど強く認識されているという傾向がみられま

図1 「職業人としての基本的能力の低下」が感じられる項目



企業アンケート2012年(注:5項目以内選択, 総回答数に対する比率)

す。その理由については、関連する文章回答内容なども参照すると、小企業では就職後必ずしも大学で学んだ専門と直接関係のない職種に従事することが少なくない状況の下で、それに耐えられない学生が少なくないことが推察されます。すなわち小企業では大学で学んだ専門的知識や能力よりも、直面する課題を解決する応用的、または総合的な能力が必要とされていると考えられます。また大企業における学生の自立心の欠如という認識は、大きな組織の中で学生は協調性や自らの位置・役割は認識するが、他面組織に埋没し主体性が十分に発揮されない状況も反映していると考えられます。

「忍耐力」とか「主体性」などについては、大学における学びや生活の各場面においても必要とされ身に付けるべき能力であり、キャリア教育や形成支援の基本的課題はそのような課題がベースとなっていることが留意されるべきといえるでしょう。
(文責 キャリア・コーディネータ 今井 健)

表1 「職業人としての基本的能力の低下」の感じられる主要項目

単位：%

項目\規模	計	企業従業員規模別			業種別	
		1,000名以上	300-999名	300名未満	製造業	非製造業
粘り強さや忍耐力	50.0	46.8	51.4	53.6	52.4	46.9
自立しようとする意識	45.5	48.9	45.9	39.3	44.4	46.9
コミュニケーション能力	36.6	29.8	45.9	35.7	38.1	34.7
社会人としての一般常識	35.7	44.7	21.6	39.3	33.3	38.8

注：規模・業種別回答総数を100とした値。5項目以内選択。上位4項目まで表出

(注1) 「大学生の就職に関する変化と行動、各大学における取組に関する調査結果」産経新聞社、2012年2月調査

(注2) またこの全国調査結果では、このような「能力低下は感じられない」という回答割合は、大学教職員の28%に対して企業は53%と、認識に大きな差異がみられ、企業よりもむしろ大学においてそのような能力低下という認識が強いことがわかる。しかし岐阜大学における当該調査では、項目設定は若干異なるが、「低下していると感じられない」という企業の回答は図1にみるように12%にとどまっており、その低下が多くの企業に認識されているといえよう。

先輩社会人「社会に出て、学生時代を振り返って」

学生のうちに取り組んでほしいこと

伊藤 允一

平成16年度地域科学部卒業生



私は、平成16年度に地域科学部を卒業し、民間企業を経て、現在は県内にある瑞浪市役所にて働いております。今は税務課に所属しており、主に固定資産税の納付についての業務を担当しております。社会に出てから、学生時代には得られなかった知識・経験を積める半面、覚えることも多く、7年が経過した今も勉強の毎日です。

さて、私から学生の皆さんにお伝えしたいことは、将来やりたいと考えていることや現在興味があることを、「全力」で取り組んでほしいということです。

この「全力で取り組む」姿勢が重要であり、その過程で得られる様々な経験や思いは、自身の大きな財産となり、社会に出たあと必ず生かされます。もし、やりたいことが見つからない人は、授業でもサークルでもアルバイトでも何でもいいので、「今までしなかったこと」を意識して行ってみてください。例えば、勉強会やセミナー、ボランティアなど、今までは躊躇していたイベントに参加してみたりすることです。そうやって様々なことを経験することで、やりたいことが見つかる可能性があります。経験してもうまくいかないことも当然あるかと思いますが、経験しないことには何も得られませんので、まずは前に踏み出す癖を身につけることが大切です。

もう一つ重要なことは、学生のうちに一人でも多くの人と接する機会を増やし、様々な人々と協働する力を身につけることです。社会人が出会う相手の多様さは学生とは桁違いで、会社の上司や同僚に加え、取引先や初対面の顧客と毎日接することになります。

私の仕事を例に挙げると、市役所の業務は、市民に喜ばれる仕事を実際ほとんどなく、現在の配属先である税務課では、納税や差し押さえなど、どちらかと言うと市民に嫌われる仕事の方が多いです。また、市役所は平均して3年で定期的に異動があり、その都度接する相手も変わってくるため、どこに配属になっても適応して働ける能力が求められます。よって、大学生活の間で、年齢層が多彩なサークルやアルバイト、その他コミュニティに参加するなどし、協働する力を高めていってほしいと思います。

最後になりましたが、この貴重な大学生活が、皆さんにとって有意義なものになることを切に願っております。

キャリア形成の自主的活動

「サマーキャンプボランティア」に参加して

西野 公美

地域科学部 3年

私は8月11日、12日の二日間に岐阜県郡上市にある「山と川の学校」へボランティアとして行かせていただきました。「山と川の学校」は田舎の自然の豊かさを都会の子どもたちへ伝えるグリーンツーリズムを行う団体です。グリーンツーリズムとは農村や漁村での長期滞在型休暇で、都市住民が農家などにホームステイして農作業を体験し、その地域の歴史や自然に親しむ余暇活動です。私の大学での研究テーマということもあり、この企画に参加してみました。

ボランティアの主な活動は、岐阜市内の子どもたちを迎えて1泊2日で川遊びをする自然体験でのサポートです。また、山と川のコンセプトは地元の子供たちが四季折々に楽しむ遊びを都会の子供たちに伝承するという事です。タイヤチューブを使って上流から川下りをしたり、水中メガネを使って魚の掴み取りをします。山には子どもたちが強くなるための障害、

川にはまるで都会では味わうことのできない豊富な生き物に触れることができます。山と川の学校の先生は「自然」です。山や川はもちろん空や空気、その自然景観すべてが先生なのです。私たちスタッフはそのお手伝いをするものとして活動します。私もこの体験が初めての自然体験で、自然の美しさに驚き、改めて自然の貴重さを感じました。

地元の方にとってグリーンツーリズムとはまちが暮らしていくための一つの生活源です。田舎では自分たちで企画し、生活を楽しむことが前提です。この学校の企画者も地元で育った方でした。郡上市にはグリーンツーリズムに関するNPO法人も多く存在します。この美しい自然は地元の人のものでなく国家の宝です。国はそのことを国民の共通認識とし、若い世代へ伝承、さらに保全していくかが課題だと感じました。しかし、地元の人々の生活や経済活動とどのように共存共栄していくかなど問題もあります。もちろん市民の対立もあります。今回、大学では学びきれない地元の現実や声を聞いて、素敵な機会をいただけたことに感謝しています。



楽しい川遊び

学部における就職・キャリア形成支援の取り組み

応用生物科学部のキャリア形成と就職状況

福井 博一

応用生物科学部就職支援室長

応用生物科学部の卒業生は、例年5割弱が企業等へ就職し、1割ほどが公務員となり、4割ほどが大学院へ進学しています。応用生物科学部の就職指導は、室長：教学担当副学部長と室員：各課程の就職担当教員及び学務係員による学部就職支援室が主体となって就職支援事業に取り組んでいます。実際の就職支援活動としては、就職担当教員が3年生および4年生のメーリングリストを作成して就職情報をEメールで配信すると共に、AIM-Sに募集情報を掲載しています。また企業等から学務係に届いた求人票、公務員関係資料及び就職関係雑誌等を応用生物科学部棟2階に設置してある就職支援室及び獣医学課程就職支援コーナーに置いて、自由に閲覧できるようにしています。さらに、各課程の専門と関連のある企業及び公務員説明会を独自に開催しています。これまで獣医学課程において個別に行ってきた地方公共団体の説明会を、来年度から公務員就職フェアとして他課程も含めて開催する予定です。

近年は就職関係NAVIでの募集が中心となっていますが、教員に募集情報が届いた場合には就職支援室員に情報を集約し、該当学生へのメール配信及び関係教員から学生への連絡通知を行っています。

学部就職支援室の取り組みとして、毎年7月と11月に学部3年生（獣医学課程5年生）と大学院1年生を対象とした学部独自の就職ガイダンスを実施しています。7月のガイダンスでは、就職活動の流れや理系の就職活動の特色及び夏休みの過ごし方について、11月のガイダンスではより実践的なエントリーシートの書き方や模擬面接について講演いただいています。さらに11月には保護者を対象とした進路指導懇談会を開催し、学部の概要と近年の就職・進学状況をまとめた小冊子「めばえ&巣立ち」を配布して保護者からの進路相談に応じています。



進路ガイダンスの様子

学生サポーター（就活支援・相談）の募集

キャリアセンターでは就職活動を始めている3年生や修士1年生を対象とし、その悩みや疑問に答える相談活動を行っています。そのなかで「学生サポーター（就活支援相談員）」の活動は、既に就職内定を得た4年生及び修士2年生を対象として募集し、自らの経験を踏まえて同じ学生の立場で就活中の学生の相談に応じ、不安を和らげ意欲的に活動ができるように励ますことを目的としています。

なお応募用紙はキャリアセンターに置いてあります。

キャリアセンターニュース編集委員

委員長 佐々木実（キャリアセンター長） 委員 今井 健（キャリアセンター特任教授）
委員 酒光伸嘉（課長補佐・就職支援室長） 委員 藪田 薫（キャリアセンター参事補）

岐阜大学キャリアセンター

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1

キャリアセンター

058-293-3393

career@gifu-u.ac.jp

就職支援室

058-293-2147・3362

job@gifu-u.ac.jp